



火の山山頂は、昼夜船が行き交う国際航路・関門海峡と、そこに架かる関門橋に加え、周防灘・響灘、九州を遠望できる、全国に、そして世界に誇る絶好の眺望地です。

火の山という名前は、古くは平安時代から外敵への備えや神事を目的として山頂に「のろし場」があったという伝承に由来します。

関門一帯の眺望地は、明治半ばから第二次世界大戦にかけて、東京湾、大阪湾に次ぐ要塞地帯となり、国防の要として厳しい統制下に置かれました。

戦後は、公園として整備され、昭和31年には瀬戸内海国立公園に指定。かつては市内外から多くの観光客でにぎわいましたが、時代の移ろいとともに訪れる人はピーク時の5分の1にまで減り、施設の老朽化も課題となっていました。

そんな火の山が、いま、未来に向けて動き出します。ロープウェイに代わる新たなシンボル・パルスゴンドラや新しい展望施設の整備、山頂のレクリエーション施設など、自然・歴史・眺望・夜景を楽しむ、新たな公園づくりが始まっています。



Photo by 山川孝一



もっとみんなの火の山に。
もっと世界のHINOYAMAに。

今後の計画

令和7年度

- 展望デッキ
(ヒノヤマリング)
- アスレチック
- キャンプ場

令和8年度以降

- パルスゴンドラ
- 屋内展望施設
- 芝生広場

※現時点での予定であり、工事進捗等の状況により遅れる可能性があります。

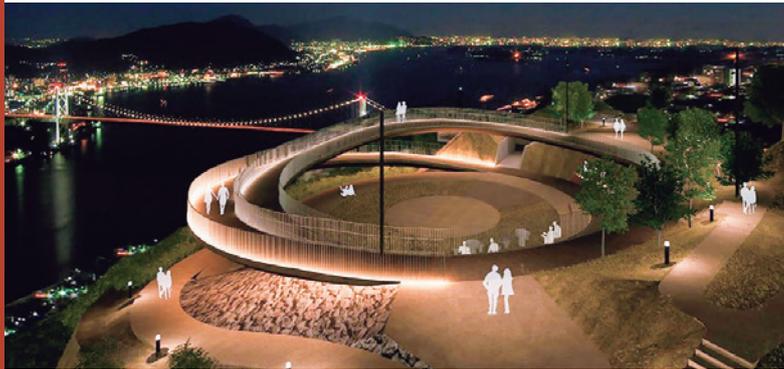
CONCEPT

再整備計画のコンセプト

- ① 火の山を、これまで以上に海峡の魅力をゆっくり味わえる場所に
- ② 未来を担う子どもと、その親世代の遊び・学びの場として、火の山を光り輝く未来を育むフィールドに
- ③ 山そのものを関門海峡の未来を照らす灯台に見立て、光を生かしたランドマークに

市民の火の山への親しみや愛着をベースに、火の山の特徴を生かし、観光客の滞在時間や夜間利用が増えることを期待しています。





中央・右：山頂からの夜景は、日本夜景遺産にも認定されている。下：美しい星空の下、ヒノヤマリングでたき火を囲んで仲間と語らう夜。



二重のリング状のデッキを巡りながら関門海峡の絶景と共に公園の自然や遺構も体感できる、歩いて移動することでさまざまな眺望を体験できる回遊式の展望台を整備します。かつて市民の、そして観光客の思い出として強く印象付いている回転式レストラン・旧展望台と同じ中心点を持つヒノヤマリングは、中央に大きな余白を残し、地形の高低差とリング状のデッキのレベル差を生かした円形劇場のような空間をつくっています。音楽祭やキャンプファイアなど、さまざまなイベントに活用でき、観光客だけでなく、市民が日常的に利用できる場所を目指しています。



市民インタビュー
なかむら みゆさん

子どもの頃、よく父に火の山に連れて行ってもらいました。大人になってからも、懐かしく思い出す、私の原風景です。本当に景色が抜群なんですよね。少しでも長く山頂に滞在できるようキッチンカーが出店できるといいなと思います。ヒノヤマリングは円形劇場みたいで、イベントをするにはもってこいですね！



火の山オリジナルTシャツを着る
永瀬氏



ヒノヤマリング設計チーム
一級建築士 永瀬 智基さん

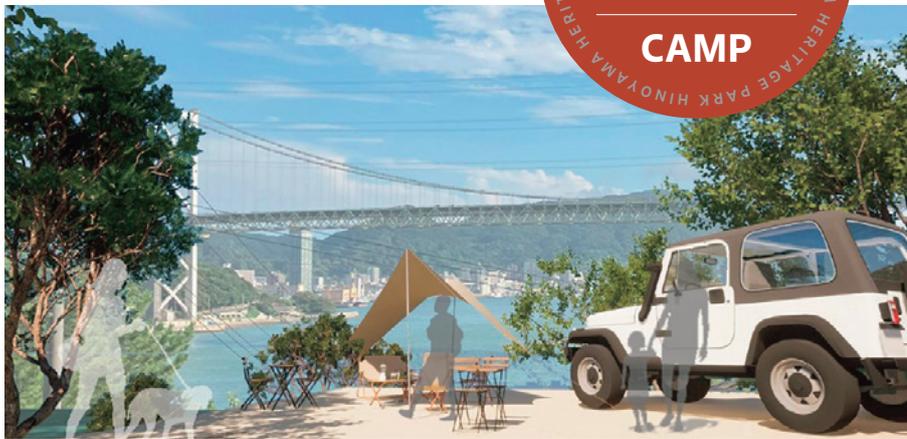
新しい展望台は「ヒノヤマリング」という名前を提案しました。かつて回転レストランで食事をし、冒険の森で遊んだ思い出を語る大人たちのように、これから公園を訪れる子どもたちにも、大人になって施設を親しみのある愛称で呼び合えるような——そんな、世代を超えて愛される場所になることを願っています。



関門海峡を眼前に望む キャンプスペース



山麓部には、海峡と、そこを
行き交う船を眼前に望むキャン
プ場を整備。新鮮な魚介が手に
入る唐戸市場が近く、海峡と船、
関門橋を眺めながらバーベキュ
ーを楽しむことができます。
付近には、ユースホステルや
海峡ビューしものせきなどの宿
泊施設もあり、入浴施設の利用
などと併せて、女性や子どもも
安心して利用できます。



▲関門海峡に向けてテントを設営可能
◀外のキッチンでは料理ができる



市民インタビュー
安本 みゆきさん



眺めの良い火の山で、誰でも気軽に楽しめるキャンプを。初心者や親子連れも、専門家のアドバイスを受けながら安心して参加できるような街中キャンプができるのが火の山のキャンプ場の最大の強みですね。女子会キャンプ、子どもの誕生日会キャンプ、金曜日の仕事終わりに手ぶらでバーベキューキャンプなんかできそうですね！



アスレチック施工業者
藤本 篤靖さん

子どもの頃、木製アスレチックで遊んだ火の山。遊ぶことに夢中で、景色はあまり覚えていないのですが(笑)。今回の整備計画は、景色と一体となった遊びが魅力。「空のブランコ」の支柱は、美しい景色のフォトフレームになっているし、「海のすべり台」は、本当に海に飛び込んでいくような錯覚に陥ると思います。大人も子どもも一緒になって楽しめる、海峡の街・下関ならではの公園になると思います。



AREA MAP
山頂エリアマップ



山頂屋内展望施設とパルスゴンドラ



火の山のなだらかな稜線になじむ、柔らかな曲線状の屋内展望施設は、平安時代からのろしを上げることでも人々に情報を伝える役割を担っていた歴史を継承し、ライトアップで山麓や対岸に、その存在を示します。

施設の前に広がる芝生広場は、絶景を背に、さまざまなイベントに活用できます。

火の山の象徴・ロープウェイは、新たにパルスゴンドラに生まれ変わります。



パルスゴンドライメージ



左：山頂駅・山頂屋内展望施設・芝生広場 中央：施設内には、山頂の玄関口の顔となるカフェを誘致する予定 右：山麓駅

当時の展望台▶



以前のロープウェイは、31人乗り×2台で往復運行していた。最終運行は令和6年11月10日。新しいパルスゴンドラは、8人乗りのゴンドラが2台連なり、4セット、合計8台がスキーのリフトのイメージで常時運行する。※運行時間等は検討中。

▲初代ロープウェイ昭和33年に開業 関門橋もまだない

火の山を訪れた際、ここでのろしが上げられていたことに強い象徴性を感じました。それをいかに現代に復活させるかを、まずは考えました。

山の緑自体が環境への強いメッセージになるので、建築の素材はあえて木ではなく、のろしのシャープな象徴性を表せる鋼素材を選びました。これにより、自然環境と調和しながらも、印象深い存在になることを目指しています。

遠くからの見え方と、近くでの体験の質の両方を兼ね備えた展望施設を目指しました。特に、ぶくをイメージした屋根(ひさし)のめくれの微妙な調整により、遠くからは印象的に、夜は存在感を、近くではそのひさしの下に質の高い空間をつくっています。

山麓駅と山頂の展望施設の対比は強く意識したところで、山麓駅は日常の延長線上にあるものとして「都市の幾何学」のデザイン、展望施設は柔らかく天に導かれるような丸みのデザインとして、異なる体験が生まれることを狙っています。

関門は日本の歴史的転換の舞台となった場所ですので、その突き抜けた感じを建築に取り込み、特定の年代の意匠に縛られず、時代を超越したい。この地に流れる渦のような回転感覚も、丸みのデザインに昇華させて、関門の歴史・地理特性を表すことで、時と渦の流れを感じられる空間になればと考えています。

今回手掛けた建築が、これからの新しい下関の象徴になることを願っています。



山頂屋内展望施設・山頂駅・山麓駅設計者 隈研吾建築都市設計事務所

隈研吾さん

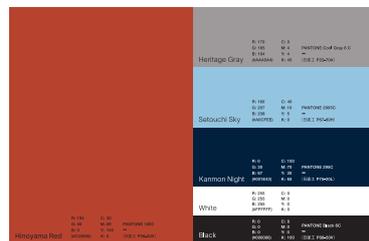
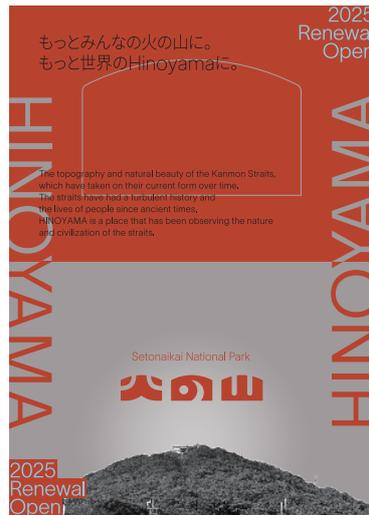


「新鮮なんだけど、たしかに火の山らしい」を実現するための火の山の「普遍性」や「既にそこにあるもの」として、①歴史、②景観、③山姿に着目しました。そして、それら3つの特徴を並べると、そこには湾曲したラインがつくる独自の共通点があることに気がきます。

本ロゴデザインは、この湾曲したラインをもったフレームを独自性として取り入れ、「火の山」という印象的な名称に掛け合わせることで、シンボリックなロゴへ昇華しようと試みたものです。訪れる人にも、いろんな火の山をよく知る地域の方々にも、長く愛着を持てるシンボルになってほしいという願いを込めています。

市民インタビュー
中村 圭太さん

高校時代、部活動で正月に学校から火の山山頂まで走って登り、今年目標を一人ずつ叫んだ辛かったけれど良い思い出があります。大人になってからも、何となく火の山に行って明日の鋭気を取り戻していました。今、接客業をしており、観光客に下関で行くべきところを尋ねられたら、まず紹介する「下関の宝」。山頂からの絶景に、多くの方が感動されます。



上：チラシ 下：カラーシステム



火の山全体としての統一感やクオリティを保つことができるよう、火の山のブランディングが重要と考え、「ブランドガイドライン」の中でロゴとカラースキームを決定しました。

ならではの

歴史



公園のあちこちでむき出しになっている独自の「歴史のかたち」

ならではの

景観



大パノラマだからその丸みを帯びた地平線

ならではの

山姿



山頂に広い公園を有す穏やかな山の姿

HINOYAMA HERITAGE PARK

火の山山頂の屋内展望施設内にカフェの誘致を予定しており、民間事業者による「関門海峡メガジップライン」構想も検討されています。あるかばーとでは、星野リゾートの「リゾナーレ下関」の開業が今年の12月に予定されるなど、火の山の再編整備が、民間投資も呼び込み、さらなる地域活性化につながるよう期待されています。

※工事期間中は、火の山公園の利用制限があります。
※火の山パークウェイは、10月末まで通行止めとなります。
関公園緑地課(☎231-1944)

市民インタビュー
木村 大吾さん

関門海峡を望む最高の景色が広がり、利活用しやすい公共空間も整いつつあります。あとは、そこに市民一人ひとりがどんな彩りを加えるかだと思います。さまざまなイベントの開催はもちろん、山頂での結婚式など、多彩なアイデアを生かして、この場所を魅力あふれる空間に育てていきたいと思っています。火の山が「心豊かな暮らしの1ページ」となることを願っています。

